

第1章 戦場

台湾での終戦

お前たちの武器はスパナだ

紙 栄吉さんのお話から

○海兵団 艦船部隊などの海軍下士官・兵の補充員を補充し、下士官および新兵の教育訓練を担当する部隊。

○予科練 海軍飛行予科練習生の略。航空機要員養成のため、主に少年から志願採用。

○赤とんぼ 赤く塗って練習機として用いた複製飛行機の俗称。

○玉砕 玉のように美しくだけ散ること。全力で戦い、潔く死ぬこと。当時は、それが名誉・忠節を守ることでされた。

○台南 表紙裏地図
○前線基地 戦場で敵と直接接触する最前列にある基地。

二十歳の時、右も左もわからずに札幌市の清田から出ていき、神奈川県武山の第二海兵団に入隊しました。そこで三か月半の厳しい訓練の後、横須賀航空隊に配置されました。飛行機の整備をする兵として、航空隊を転々しました。次は、羽田の航空隊に移り、十八、十九歳の若い予科練生達が飛行訓練をする赤とんぼという練習機の整備を一生懸命やりました。その次は、愛知県豊橋の「曙部隊」という名前の実戦部隊に配置されましたが、この部隊には、爆弾を積んで攻撃に出て、たまに帰って来ない飛行機もありました。その次は、千葉県木更津の航空隊に移りました。ここは前線基地で、空爆に出る「第三次大鳳部隊」という玉砕部隊でした。頭が良くて器量も良く背が高く、格好の良い男の中の男が搭乗員でしたが、この人たちがみるみるうちに半分になってしまいました。敵地の攻撃に出て、飛行機ごと帰って来ませんでした。その次は、鹿児島県の出水というところで、敵の爆撃機が飛んで来ました。初めて見た爆撃機 B 29 が編隊飛行で悠々と通るのを何度も見ました。

その次は、台湾の台南航空隊です。台南は台湾の真ん中あたりにあります。ここは「大鳳部隊」の前線基地で、敵の爆撃機もどんだん来しました。フィリピンからと思われる B 29 の編隊が、午前一回、午後一回必ず飛んで来ました。だいたい、六機編成の三隊で来ました。「お前らは整備科の兵隊だから、お前たちの武器はスパナだ」と言われましたが、爆撃が始まると、防空壕に逃げ込むのが仕事でした。まるで雨あられのような空爆でした。

台南には敵の飛行機を射撃する高角砲陣地が五つ六つありました。アメリカの B 29 の編隊

○スパナ ナットやボルトを締め付ける道具。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身をを守るためにつくった穴や地下室。

○撃墜 飛行機を撃ち落とすこと。

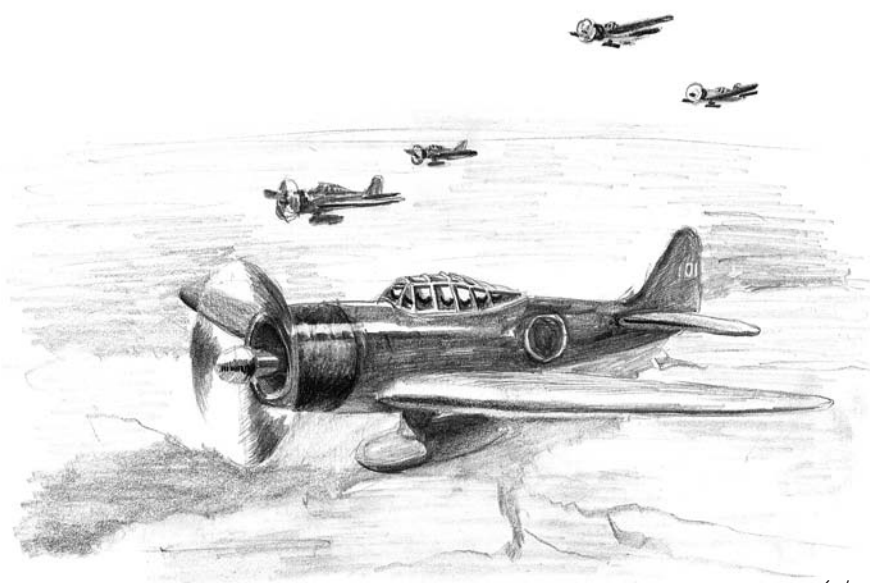
○報復攻撃 仕返しをする。国家間で、一国の不当な行為に対して、他国が同等に不当な行為で報復すること。

○螺旋爆弾 小型で地上に触れるか触れないかで炸裂し、全く水平に螺旋の破片が飛び散る爆弾。

に向けて撃ち上げるのです。弾はいいところまで飛ぶのですが、全然当たりません。アメリカの飛行機は一万二千メートルぐらいの高さを飛びますが、日本の高角砲は上空八千メートルまでしか届きません。しかし、そのうち、低空飛行で来たアメリカの一機を撃墜しました。飛行機が落ちて、燃え上がり、パラシュートで降りたアメリカ兵も全員捕まえました。毎日やられっぱなしだったので、みんな喜びました。

ところが、次の日、アメリカの報復爆撃です。その日は一日中、百機ぐらいの爆撃機が来て、兵舎から何から、水牛を連れた台湾の人たちまで死にました。アメリカの爆弾は大きな爆弾の間に、螺旋爆弾と言って人馬殺傷用の小さな爆弾を束にして五十ぐらい積んでいます。それを何十機もの飛行機が落とすのですから、本当に雨あられ状態です。滑走路も、猫がひっかいたように傷だらけでした。高角砲陣地がやられ、陸軍の兵隊も三十人ぐらい死にました。戦争は死ぬのが当たり前と思っていました。三十人死ぬのを見たから、やっぱり身震いしました。そして、これが私たちの運命なのかと感じました。爆弾のおしりに風車のようなものがついていて、これが何百も回って飛んでくるので、ものすごい音がします。この音でみんな頭の毛が逆立つくらい恐怖を感じました。そして、防

お前たちの武器はスパナだ



イメージ図

台南航空隊の零戦

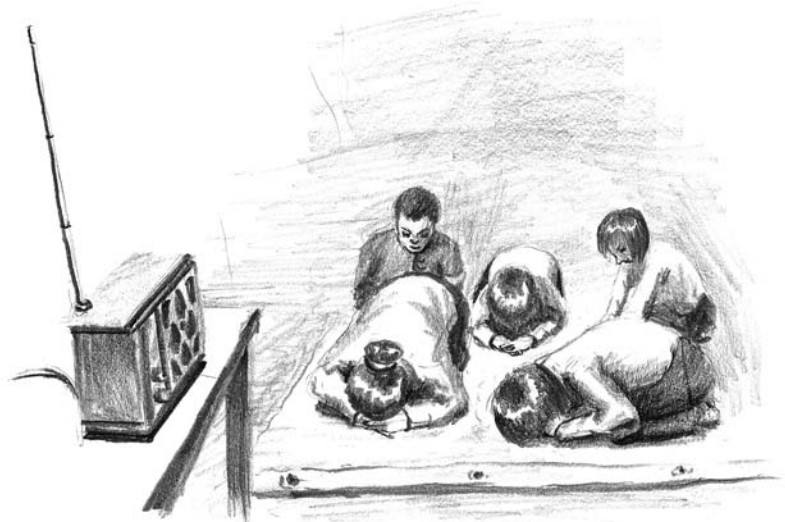
○玉音放送^{ぎょくおんほうしゅう} 天皇自身^{てんのう}の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

空壕^{くうこう}に逃げ込むのです。終戦後も、この爆撃^{ばくげき}を夢^{ゆめ}で見たことがあります。それぐらい恐ろしかったです。「天皇陛下^{てんのうのうへい}下方歳^{かばんざい}」と倒^{たお}れて護国^{ごこく}の花^{はな}となって散^ちったなどというような綺麗な話^{きれい}ではありません。腸^{いん}が飛び出ても死ねない、足^{あし}がもげてても死ねない、痛^{いた}くて苦しんで泣^なき叫^こぶ兵隊^{へいたい}の姿^{すがた}を目^めの当^{あた}りにします。このような場面^{ばめん}は日本の国^{くに}の肉親^{にくしん}にはとても見^みせられないと思^{おも}いました。

天皇陛下^{てんのうのうへい}の玉音放送^{ぎょくおん}があつて、大尉^{たいい}が「日本は戦争^{せんそう}に負^まけて、戦争^{せんそう}はこれで終^おわりだ。」と言^いいました。横^{よこ}にいた士官^{しゆかん}は涙^{なみだ}をこぼしていましたが、私^{わたし}は涙^{なみだ}が出^でませんでした。恥^はずかしい話^{わたりばなし}ですが、「これで命^{いのち}が助^{たす}かったかな。」と思^{おも}いました。

次^{つぎ}の日^ひ、私^{わたし}は驚^{おどろ}きました。毎^{まい}日^{にち}のように爆撃^{ばくげき}しにきていた飛行機^{へいこうき}が一機^{いちき}も来^きません。まさには、平和^{へい}そのもので、「戦争^{せんそう}は終^おわつたんだな。」とみんなで言^いいました。こんなありがたいことはないと思^{おも}いましたが、ただ一つ心配^{しんぱん}がありました。戦争^{せんそう}は終^おわつたけれども、本^{ほん}当^{とう}に国^{くに}に帰^{かえ}れるのかということ^{こと}です。このま^ま戦争^{せんそう}犯罪者^{はんざいしや}で連^{れん}合^{ごう}国^{こく}の牢屋^{らうや}につな^つながれて死^し刑^{けい}になるのではと、い^いう不安^{ふあん}です。お答^{こた}めは何^{なに}一つありませ^せんでしたが、すぐには帰^{かえ}れず、アメリ^あリカ^{りか}が準^{じゅん}備^びしてく^くれた貨物船^{かぶつせん}で、三^{さん}か^か月^{げつ}後^ごに台^{たい}湾^{わん}の高雄^{たかお}から日^に本^{ほん}に帰^{かえ}るこ^ことがで^できま^ました。

い^いま^まだに忘^{わす}れ^れられ^らない思^{おも}い出^でが^があ^あり^りま^ます。私^{わたし}たち日^に本^{ほん}の兵^{へい}舎^{しや}の隣^{となり}に中^{ちゆう}国^{こく}軍^{ぐん}が兵^{へい}舎^{しや}を並^{なら}べ



玉音放送^{ぎょくおん}を聞^きく国民^{こくみん}

イメージ図

○**非国民** 当時の日本では、戦争に協力しない者や戦争に反対していると見なされた者を、国民としての義務を守らない者、国家を裏切ぎるような行為をする者として、**非国民**と呼び非難した。

○**国賊** 国を乱す者。国に仇する者。

○**鬼畜米英** アメリカやイギリスを残酷な行いをする鬼と畜生にたとえたもの。

した。私は「アメリカに負けたけど中国に負けたのではないぞ。」という気持ちがありました。が、「日本は負けたのだから、国に帰ったかったら中国の兵隊に変なことをしちやだめだぞ。」と言われていました。私たちは二十五、六歳、中国の兵隊は二十歳前後でした。日本の兵舎で、ポケットモンキーという小さな猿を飼っていました。この猿が、みんなの心を慰める存在となっていて、一日いっぱい見ているだけでも飽きませんでした。人間と同じことをするのは、「こらっ。」と言うと、頭に手を当てたりしました。少しして、中国の兵隊が通訳を連れてきて「モンキーを分けてください。」と言うので、あげました。喜んで連れて帰ったその晩、モンキーが逃げて帰って来ました。中国の兵隊といっしょに兵舎の二階にいるモンキーを捕まえるということになりました。言葉は通じなくても、身振り手振りでお互いに協力して一時間くらいかかってつかまえました。私は思いました、「なぜ、この人たちと殺し合いをしなければならなかったのか。」と。「本当に戦争というのはひどい。二度とするものじゃない。」とみんなで話し合いました。

戦争とは一体何なのかと思います。当時は戦争に反対したら「**非国民**、**国賊**。」と言われました。子どもの頃から、「鬼畜米英」と聞かされて、アメリカや中国は日本の敵だと思っていました。ところが、実際はそうではなかったのです。破壊、強盗、殺人、放火、暴行、傷害、この世にある悪の限りが集まっているもの、それが戦争なのです。このようなひどいことを二度としてはいけないと、私は強く思います。

DATA

平成20年度清田区平和事業
聴き取り

- ・平成21年1月14日
- ・清田区民センター

紙 栄吉(かみ・えいきち)さん

- ・大正10年(1921年)生まれ
- ・札幌市清田区在住



お前たちの武器はスパナだ